活発な意見が交わされる
里山森林整備実行委員会議

持続可能な森林の活用を目指して

町の豊富な森林資源を新たなビジネスとして生かす取り組みが、森林組合を中心に進められています。その取り組みの一端を紹介します。

森を活用した新ビジネス

平成十六年九月から、葛巻町森林組合（中崎和久代表理事組合長）が主体となり、「森からの新ビジネス展開事業」が進められています。

「炭で瑞々（みずみず）しい森林（もり）づくり」がキャッチフレーズ。主な事業の目的は、森林整備によって発生する間伐材や林地残材などで木炭を生産し、その木炭を水質浄化や土づくりに利用して、環境づくりや農林産物などの生産・流通のための試験研究を行うことです。

委員ら13人の知恵と力で

里山森林整備実行委員会（竹川高行委員長）を組織し、「森林整備」「木炭新活用」の二つの分科会が設けられています。

委員は、安孫自然塾長の外久保蔦雄さん（垂柳）、小岩金網（株）の折本忍さん（遠矢場）と工藤喬さん（盛岡市）、外久保勝彦さん（垂柳）、上川原和枝さん（星野）、立花幸子さん（下町）。アドバイザーとして、いわて環境パートナーシップの高橋求さん（北上市）、コーディネーターは銀河系いわて大使の及川孝信さん（東京都）です。本年度から、グリーンテージの大平守さん（田子）と葛巻ワインの漆真下満さん（橋場）の二人が加わり、事務局員二人を含めると十三人。各委員は労力を惜しまず、持ち前のアイディアを生かしながら活動を続けています。

炭で水質浄化と土づくり

委員の最初の作業は炭窯づくり。安孫地内に完成した窯で、早速アカマツ間伐材を活用した炭焼きが始まりました。

「水質浄化システム」は、木炭をネット袋に詰め、金網カゴに入れて河川に据え付ける装置で、町内では平庭高原と安孫の二カ所に設置されています。設置から約七カ月後に測定した水質調査では、炭による水質浄化の効果が認められています。

昨年は、浄化されたきれいな池の水で、クレソンやワサビの栽培、タニシの製品化に向けて取り組みました。タニシの試食会も行い、味も上々。今年はわずかながら、グリーンテージなどへの供給が実現しそうです。

炭を敷き詰めたハウスでは、土に木酢液を散布し、イチゴやラディシュの栽培試験が行われました。使用済みの木炭は、林地などに散布し土壌改良に活用できます。炭は効用も多く、環境に優しい自然素材。今後も用途の広がりが期待されます。

平庭高原に設置した水質浄化装置の保守管理
（金網カゴ１基の木炭量は128㌔）

炭で瑞々しい森林づくり

竹川委員長は「森からの新ビジネス事業の基本理念は、トータルコストで考えること。目に見えないこだわりを持って知恵を出し合えば、森林の可能性はもっと広がる」と熱く語ります。

今後は、木炭による水質浄化システムの宣伝や安孫自然塾とのネットワーク化など、森のビジネスのシステムづくりに力を入れる予定です。「森林の炭を活用して、水をきれいにすること」。そこからつながるたくさんの恵み。実行委員会は、今年も新たな計画を取り入れ、さらに持続可能な森林の活用を目指して活動を進めていきます。

イチゴなどの栽培試験
を行った木炭ハウス

製品化に取り組んだタニシ